

あけぼの会全国大会 in 神戸

川野紀子・あけぼの会副会長、あけぼの兵庫代表

皆さまのおかげで〈あけぼの会全国大会 in 神戸〉、盛会の裡に終えることができました。兵庫では、顧問医の三好康雄先生が日本乳癌学会学術総会の第 30 回記念の年に会長に就任されたこともあって、そのお祝いと成果をお聴きする記念講演会をする計画を立てていました。そのお話をワット会長にしたところ「折角だから全国大会にしてみんなでお祝いしましょう」ということになりました。

【あけぼの会】本部東京復帰元年ということもあって、是非とも成功させたかったのですが、なにしろコロナ第 7 波の真只中、9 月になっても申し込みがボチボチで気を揉みました。でも大会が近づくにつれて増えてきました。ワット会長に、また全国のお仲間に、久しぶりに会いたい、という思いを募らせたのでしょう。日に日に申し込みがあり、結局、ふたを開けて見ると、北は北海道から南は九州まで 22 の都道府県から総勢 170 名もの大集結になりました。定員 300 のホールが程よく収まっていたのを見てホッと胸をなでおろしました。

「がんの後はやさしく強く行きましょう」ワット会長

講演の最初は、ワット会長が「がんの後はやさしく強く行きましょう」というテーマで、【あけぼの会】の紹介と会長のおはこ「がんのあと潔く生きる 10 か条」の一部を話されました。間に今年の乳癌学会の患者団体・市民団体ビデオメッセージに応募したビデオレターも流しました。「がんにあなたの人生すべてを支配させてはいけません。あなたの人生はあなたのもの。主導権はどんな時もあなたの手でしっかり握っていて下さい」のメッセージは、みんなに勇気と希望を与えてくれ、「がんの後はやさしく強く生きよう」に繋がりました。

「日本乳癌学会のトピックス」三好康雄先生

この日主役の三好康雄先生は、ご自分が会長だった「日本乳癌学会のトピックス」をお話されました。「乳がん診療ガイドライン」(日本乳癌学会作成)の説明では、よい医療を実践するための Shared decision making(共働意志決定)のツールであり、患者医療者間で十分な情報共有をして治療を決定するために用いるものだと教えて下さいました。

また BC-PAP (Breast Cancer Patients and Advocates Program) についても患者の代表が患者の視点に立って考えたプログラムを先生方と共同で作って下さったセッションであること、また患者同士の交流の場として企画したこと、そして、それが日頃の患者支援活動に繋がることなので患者の皆さんも是非参加して下さいと言われました。

「乳がんと遺伝子—乳がんにおけるゲノム医療の役割」永橋昌幸先生

最後は、永橋昌幸先生が「乳がんと遺伝子—乳がんにおけるゲノム医療の役割」についてお話して下さいました。はじめにがんは遺伝子の病気だと言われて、分かり易いイラストをふんだんに使い、DNA は生命の設計図であり DNA・遺伝子・ゲノムとは何かと基礎から丁寧に。そして乳がんにおけるゲノム医療について、がん遺伝子パネル検査を用いたゲノム医療で分子標的薬の適応や免疫チェック阻害剤が使える可能性が分かるとか、遺伝性乳が

んと遺伝子変異に基づく医療については予防的乳房切除・卵巣卵管切除の話もされました。

乳がんにおけるゲノム医療の課題と可能性

現状としてはがん遺伝子パネル検査が役立つ場面が少ないけれど、乳がん患者さんにゲノム医療は役立つのか？と問われたら将来的には役立つ時がきつとくるから YES！と思うと言われました。今までいくつかのゲノムの講演を聴きましたが、こんなにわかりやすい説明をしてもらったのは初めてで、やっと自分なりに整理して理解できました。

第2部はパネルディスカッション「医師と患者の意志疎通」

司会は佐古田洋子先生・会長・川野の3名。パネリストは二人の講師の先生がたに河野範男先生・小西豊先生、宮内啓輔先生が加わって5名。先ず司会の佐古田先生からパネリストの先生方に「こんな患者さんは困った」といった経験があるか質問を投げかけられると、

- 患者さんの思い込みと医師の専門的知識のギャップ、本や週刊誌を読んで中途半端に勉強してきて医師が分かっていると決めて、説明しても分かってもらえず一方通行になった。
- 限られた時間の中で患者さんの気持ちを汲みながらコミュニケーションを取るのに苦労していることや自分の伝えたいことがちゃんと伝わっているのかと思うことがあるなど、先生方も本音を話して下さいました。患者サイドからは、
- 診察室で初めて聞く言葉や内容でも医師や看護師には日常の話なので温度差を感じる、
- 分からないことがあったら聞いてと言われても、質問することが分からないなど、会場を巻き込んで大いに盛り上がりました。

先生は診察室で難しい顔をせずにやさしく笑顔で、と注文を出したり、主治医と上手くいかない人から不満発言が続けて出て来ると、つかさず、ワット会長が「先ほどの講演で Shared decision making の話をされたでしょう。ドクターは患者の希望を尊重して、共に考え、共に決めようと言って下さっている。だから患者もきちんと勉強して自分の病気に謙虚に向き合うことが大事でしょう」とたしなめる。その瞬間、会場はうなずき納得しました。さすがワットと会長だと思わせるシーンでした。

そして最後は三好先生が、「我々医師は患者さんとの間にギャップがあることを認識しないといけないですね。例えば抗がん剤治療をした時に副作用が出るのは分かっているので副作用が少なくて良かったと医師は思うけど患者さんは副作用が出たことを不満に思う。そんな所を一つずつすり合わせていってきちんと理解し合いギャップを埋める努力が必要」と締めくくっていただきました。

フィナーレは華々しく！

フィナーレは、恒例の全国からの会員さん紹介です。ワット会長と深野百合子・前会長が北から県名を呼んでその県の人立って挨拶したり手を振って応えたりしました。久しぶりの懐かしい顔を見て会長の顔がほころんでいました。勇気を出して一人で来られた人、お友達・ご夫婦で来られた人、それぞれがいろんな思いを持って全国から参加され、あけぼの会の会員が一つに結ばれた瞬間でした。一般参加の人からもあけぼのパワーを感じたとの声が入りました。やっぱり、あけぼの会の仲間は温かくていいなあ実感しました。